



作文3部

もんぶかくだいじんしょう
文科科学大臣賞

「いただきます。」

岡山県岡山市立石井中学校一年

平井 万裕

私は白いご飯が大好きです。ご飯が炊きあがると、誰よりも先に炊飯器のふたを開け、ふわっとした炊きたてのご飯の匂いを吸い込みます。まっ白に輝いているご飯をみんなの茶碗によそいながら、自分が幸せな時代に生まれたことを改めて感じています。

小学生の頃、夕方からバスケットボールの練習に行く私のために、祖母はいつもおにぎりを作ってくれました。炊きたてのご飯で作ったおにぎりは、塩味だけなのに最高においしかったです。

「この中には、ばあちゃんの気持ちもぎゅっとつまっとるからな。」手塩にかける“という言葉があるじゃろ。心を込めて作ったおにぎりは塩味だけで十分じゃ。」

そんな、祖母の言葉通り、おにぎりのおかげで三時間近いきつい練習も最後まで頑張ることができました。

うちで食べているお米は、いとこの家族が一生懸命作ってくれたものです。朝日米という米粒が大きいお米で、もちもちして、冷めてもおいしいです。このお米で祖母が作ってくれるばら寿司も最高です。祖母は、「お寿司を作る時は新米よりも古いお米を使うようにしているよ。」と、話してくれました。新米は水分が多いので、お寿司がやわらかくなくなってしまいます。祖母が作ってくれるレタス入りのチャーハンも絶品です。

おいしいご飯料理を次々に作ってくれる祖母ですが、今はやりの、玄米ご飯や五穀米などを作ることはありません。祖母は以前、こんな話をしてくれました。

「ばあちゃんは一九三七年に生まれてから、大きくなるまで、白いご飯をお腹いっぱい食べたことがなかったんよ。今の玄米ご飯や五穀米のような色のついたお米や、麦がいっぱい入ったご飯ばかり食べたこと。ご飯の中には、いもや豆がゴロゴロ入っていて、のどにつまったこともあった。白いお米のご飯が食べられたのは、一年に一度の秋祭りの日だけ。大きな飯ぼうの中、まっ白い寿司飯がゆげをあげているのを見た時、心の底から幸せじゃなあと思ったんよ。」だから今だに玄米ご飯や、七分づきご飯を見るのも嫌だそうす。

「もう一生分食べたから、これから先は、大好きな白いご飯を食べたい。」と、言います。毎日、あたり前のように白いご飯を食べていた私にとつて、祖母の言葉は驚きでした。

また、祖母は八月十五日に必ずだんご汁を食べています。私も、以前食べたことがあるのですが、具は玉ねぎだけで、ほとんど味の無い、粗末な汁でした。昔は小米という米がわれたものを粉に引いて作ったそうです。祖母は毎年終戦記念日の日にだんご汁を作り、食料難でお腹をすかせていた日のことを思い出しているのだそうです。

六十七回目の終戦記念日に、私は祖母や母、兄と一緒にだんご汁を食べました。そして、祖母がどんな思いでだんご汁を食べているのかを考えてみました。祖母は毎年この日に、八歳で終戦を迎えた幼い日を思い返し、お腹いっぱい白いお米が食べられることに感謝しているのだと思います。そして、もう二度と悲しい戦争が起きないように祈っているのだと思います。今まであたり前だった白いご飯は、日本の平和の象徴のように思えます。

今私は改めて、白いご飯をお腹いっぱい食べることの出来る幸せに感謝しています。戦争のない平和な時代に生まれたこと、いとこの家族のように、お米を大切に作ってくれる人がいること、そして、愛情を込めてご飯を作ってくれる人がいること…。炊きたてのご飯を見る度に、たくさんの思いが込み上げてきます。今日も感謝の気持ちを込めて、「いただきます。」